

旧二条城跡の発掘調査

調査期間：令和2年 4月7日（火）～ 5月15日（金）
調査機関：京都市 文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課



1 旧二条城について

旧二条城は、室町幕府第15代将軍足利義昭のために織田信長が建てた城です。義昭と信長に謁見したルイス・フロイスは、今日まで日本において見たことがない新たな城で広大で華麗な宮殿であることや、石仏や五輪塔などの石造物も徴収しわずか60日で建てられたことについて驚きを持って記述しました。実際に地下鉄烏丸線建設工事（以下「烏丸線」という）時に発見された石垣には石仏が転用されており、城の痕跡が今も地中に残されていることが確認されました。

2 復元案

旧二条城跡についての考古学的な調査はまだ多くありません。それは市中にあった広大な城であること、義昭と信長が敵対するようになると城は破却され資材は安土城に運ばれたため、現在は地上にその痕跡が確認できないことなどが原因と考えられます。しかし烏丸線や他の発掘調査でみつかった濠跡、文献の記述を手掛かりに復元案（図1）が考えられています。

3 今回の発掘調査

今回の調査地は内郭北濠の西端推定地に該当します。烏丸線で濠と石垣が発見された地点の西延長部に相当し、その濠幅は約11mありました。調査地はこの濠肩の延長線上に一致すること、敷地の南北幅が濠の幅と近いことから、濠が続いていることが期待されました。また最新の復元案では当該地は内郭の北西角にあたります。中世の主要な道路であった室町通りを突き抜けて西側へ延びているかについては議論があり、濠が敷地内で曲がっているのかを確認することも課題でした。

4 敷地全体が濠だった

結論から先に述べると、今回の調査地は当初推定したとおり敷地全体が濠跡でした。そして敷地内で曲がらずに室町通りの方向へ続いていました。現在の地割は旧二条城の濠跡を踏襲していたことがはっきりしました。

濠の規模

烏丸線で見つかった濠幅は約11m、今回調査では濠の肩が隣地境界の付近になるため確認できませんでしたが、当時の地面からの深さは最も深いところで3mあることがわかりました。堆積層から水堀であることも確認できました。濠を埋め戻した土の中には石垣に使用されるような大きな石が入っていたことから石垣があったことが推測されます。

濠の埋戻しとその後

濠の最下部には水が溜まっていた時の堆積層があり、埋土下部は大きな石も時々入る粗い埋め戻し土でしたが、上部は丁寧に整地されていました。遺物はほとんど入っておらず詳しい時期は不明ですが、破却後、江戸時代初頭までに埋められたと考えられます。幅約11m、深さ3m、一辺が100m以上ある濠を埋めるのは大仕事です。一体誰が埋めたのでしょうか？

濠を埋め戻した後の丁寧に整地層の上には新たに南北方向の溝が掘られました。深さも幅も1m以上ある溝です。平成12年度に当該地の北で行われた発掘調査でも同規模・同時期の溝が検出されており、つながっていた可能性があります。防御のための濠や溝が無い敷地割に東西方向の建物が建てられるようになったのは、江戸時代の前期後半です。

ほんの一端ですが戦乱と京都の町割りの変遷がわかった意義ある調査となりました。

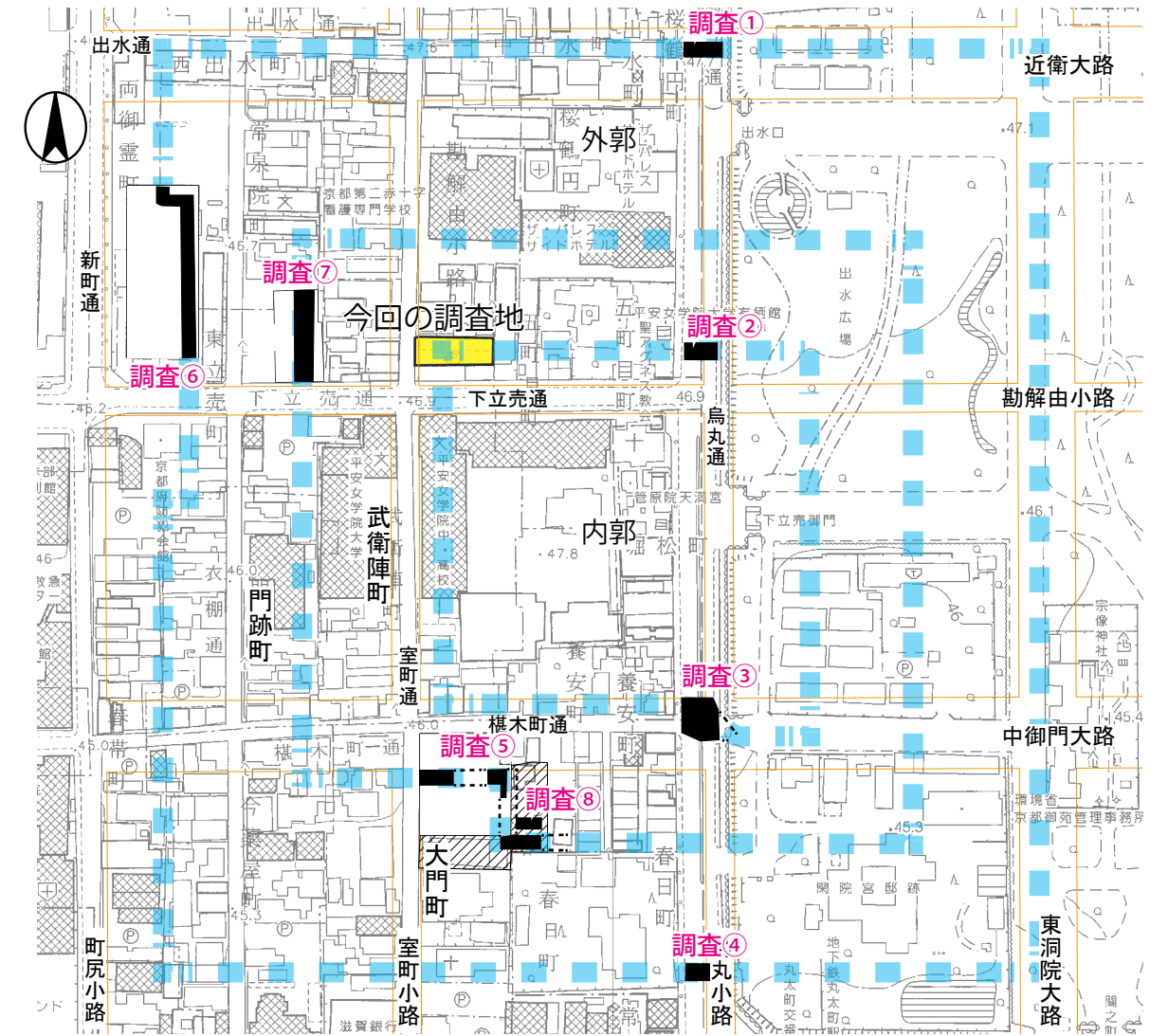


図1 旧二条城復元案（馬瀬智光 京都市文化財ブックス第31集『天下人の城』2017より）



図2 旧二条城の濠断面（北西から）



図3 埋め戻された後の土地利用（東から）